

東京大学 医学部医学科 3年 矢野孝信

前期に引き続き、ソウル大学にて自由専攻学部に所属。

### 寮生活について

2018年度後期も、前期と同じくソウル大学の学生寮の方に所属をしていました。2つある学生寮のうちより設備も整っている代わりに少し家賃の高い、906棟に住んでいました。部屋は二人部屋、机や衣装棚などの家具も全て2つずつあり、トイレとシャワーは完備、Wifi と洗濯機も自由に使え、生活空間を2つに仕切ることも可能です。部屋は前期と同じく非常に良い環境で、また、ルームメイトも今期は運よく韓国人の院生の方と一緒になれ、それが語学の向上という面では、非常に良かったです。

### 語学堂について

後期も前期と同様に午前は語学堂、午後は大学での授業という形でやってきました。語学堂のレベルは最高6級中の5級まで上がり、内容も会話や劇などではなく、会議やディスカッションなど難しい内容も行うようになりました。議

題も野良猫の避妊手術の是非や奨学金給与を成績重視か所得重視にするかなど、大学で扱われる内容に近いものとなっていました。前期まではただ日常生活で必要な範囲までしか使えませんでした。今季に入り、韓国の友人とも議論できる程度にまで上達し、より会話が広く深いものになったと感じます。クラスメイトは中国人が多いものの、チリ、フランス、ベトナム、ロシア、ウズベキスタンなど、非常に国際的でした。各国ごとに、もしくは各文化、宗教ごとに、価値観や歴史観、結婚観などが全く違うことがやはり印象的で、議論していても話がつきませんでした。前期はほとんど韓国語をしゃべれない状態からスタートしたのですが、後期は頻繁に韓国での親族や友人と交流していたのも相まって、議論でもプレゼンテーションでも他の生徒とは段違いだとの評価をいただきました。おかげで、後述の入院期間も韓国語で不自由なく生活できたように思います。今回の留学の主な目的の1つが韓国語でのコミュニケーションの向上だったので、この結果には非常に満足しています。

## 授業について

今回受講した講義は2つで、1つは東アジア研究、もう1つは日韓の比較研究

でした。最初の東アジア研究に関しては、月木週二回の一コマずつで、約 20 人の学生のうち私ともう一人の東大の留学生を除く全員が韓国人でした。彼らの英語能力は非常に高く、TOEFL のスコアも 100 点以上の生徒がほとんどでした。教授は Javier Cha という 30 代のカナダ出身の在米韓国人の助教授で、東アジアの歴史研究を専門にされておりご自身の論文もいくつか授業の中で読んでいきました。内容としては韓国という国の成り立ちや概念、擬史、両班文化、食文化や慰安婦問題などに関して、歴史を追って幅広く扱っていきました。各授業では助教授の講義を挟みながら生徒が指定された論文に関して 20 分ほどにまとめて発表していき、最終回のテストと合わせて成績を決定、という形式でした。

私が担当したのは、海上関係から見る韓国の植民地及び領域の変遷で、結論から言うと、国の持つ力や他国との関係性は領土という面積で測れるものでなく、港の位置や航路など、海上関係で見ると点や線に当たるものに着目することが重要になりうる、というものでした。

この授業は今回東大からソウル大学に留学に行った生徒は必ずとる指定のもので、韓国の歴史と政治を一通り知っていることが土台となる、一步踏み入ったものでありました。確かに一つ一つの内容は長く時間をかけてよく理解すれば

興味深い内容だったのですが、東アジアの歴史や文化を専攻しておらず基礎知識がまるごと欠けた私には、時代背景や地名を英語と韓国語で覚えることから始まるのが重荷でした。論文を読んで準備しても授業についていけないことが多く、さらに体調不良と入院期間が重なり欠席日数がかさんだこともあり、途中で授業を継続して受講することを断念しました。

2つ目の日韓比較に関しては、そもそも授業への参加義務がなく、最終日に各グループが英語で特定の主題についての日韓比較の論文を提出すればよい、というものでした。私は韓国人学生二人と組んでやっていき、途中までは両国の広告の差異について、俳優や女優、背景の取り入れ方や秒数、商品の魅せ方の違いなどを調べていきました。ここでは言語の壁を非常に高く感じるものとなりました。私の韓国語の実力が伸びたこともあって会議も調査も韓国語で行うようにしたのですが、韓国語でのウェブ上の情報や論文を読み、まとめる、というレベルはまだ高すぎたようでした。かと言って、英語や日本語媒体では研究がなされてない、調べたい内容がない、ということが多く、まさに2つの国の比較研究という難しさを実感しました。比較対象も高齢化問題から医療、保険制度、教育制度、観光、広告、など、約1ヶ月二転三転し続け、これもなかなか作業が進

まない原因であったと思います。

この授業に関しては受講決定の際にうまくウェブ上での登録が行われなかったようで、生徒としてカウントされていないというのが病院から退院した数日後に発覚しました。結局受講として換算されず、また論文作成や資料集めの際に二人の力になれていなかったことから、こちらの授業もそのタイミングで断りを入れた上で断念しました。

結果として2つ授業を受講しましたが両方最後まで受講することなく断念、という形になりました。要因としては、語学堂が5級に上がり宿題の分量なども増えて忙しくなったこと、また、前期とは異なり、授業自体が韓国人向けの韓国の歴史や文化の研究であった、ということが考えられます。断念した後は結果として、韓国語学習に時間をより投入することができよかったです、少し残念な結果となってしまいました。

学内生活について

ソウル大学は韓国国内で最も敷地面積の広く、冠岳山沿いにあるので、緑が多く非常に美しいキャンパスです。空気も澄んでおり、いつでもどの位置にいても

山を見ることができます。前期から引き続き過ごしていったソウル大学ですが、やはり自然が美しく、特に秋になると非常に綺麗な紅葉が映えました。ただ、冬になるとソウル市内よりも冷え込む大学内で、時々外出するのが億劫になりました。寒い時は零下20度ほどまで落ちるので、防寒対策は本当にしっかりしていた方が良いでしょう。韓国は、室内はオンドルなど暖房器具が充実しており半袖で生活する人もいます。外に出た時との温度差が激しく、私も体調を崩すことが何度かありました。

食堂では、食堂ごとに2つか3つだけのメニューがあり、そこから好きなものを選ぶ、という形式です。その代わり毎日メニューが変わり、飽きることはありませんでした。値段設定は300~500円ほどで、ご飯のお代わりができ、野菜のおかずも多いので満足度も高かったです。記念日にも対応していて、小豆粥や参鶏湯などその日に応じた季節のメニューが嬉しかったです。学内はレストランも多く、イタリアンから東南アジアまで様々な国の料理を楽しめました。

後期は、授業登録の案内が大学側から受け取れなかったり、ビザの延長手続きがうまくいかなかったり、突然に入院したり、寮滞在期間の延期申請に手違いが生じたりと、ハプニングが非常に多い学期となりました。しかしその都度非常に

丁寧に助けてくださったのが、自由専攻学部の先生方、特にキムチャンミ先生でした。おかげで、全て問題なく解決してくださったので、本当に感謝です。海外での大学生活なので、失敗やわからないことはあって当然ですが、このように問題が生じた時に助けてくださる方がいてくださるかどうかが本当に大事なのだなと思わされました。自由専攻学部では学生が数人集まって、釜山を訪ねるプログラムがありました。釜山は、交流の面でも闘争の面でも日本と非常に馴染みの深い地です。博物館や歴史建造物など様々訪れましたが、特に私には美術館が印象的でした。特に戦前、戦後の美術では、当時の日本統治下であったからこそ開花した芸術作品が多数残されており、それらは鮮烈な印象を与えました。韓民族の持つ「恨(ハン)」は日本の「恨み」とは違うんだ、と聞きましたが、その「恨」の世界、悲しみの歴史観を芸術を通して触れたように思いました。

## 入院について

韓国に約一年間留学して最大の事件が、突然の入院でした。気胸とって、肺に穴が空いて空気が漏れるというもので、重病ではないのですが手術が必要なものです。その気胸を2018年10月、12月に二度も発症してしまいました。気

胸だとわかった当時は軽いパニックになりましたが、付帯海外という海外保険制度に入っていたので助かりました。付帯海外は今回の留学制度で入る規定になっていた保険サービスで、これのおかげで韓国の病院への診察、入院手続きから料金面まで全てスムーズに進みました。入院費の方も、保険不適用では一回約120万円に相当しましたが、保険会社の方で全額支払われましたので、本当に救われた気分でした。会社の対応も迅速かつ丁寧で、側で見ていた韓国人の知人も、「やはり日本のサービスは違う」と舌を巻いていました。

入院期間中は看護婦、医師と全て韓国語でコミュニケーションをとっていました。医師の説明など、専門用語も多く複雑なので最初は非常に心配でしたが、蓋を開けてみると何一つ不自由ありませんでした。この経験を通して自分の韓国語能力が前期に比べ格段に向上したことを感じました。語学堂の授業で外国人と間違えながら喋っているのではなく、使わなくてはならない状況で韓国人相手でも正確にコミュニケーションを取れたことが自信にもなりました。

約二週間ほどの入院になりましたが、将来医者として病院に勤務する身としては、この経験が今回の留学期間では非常に学ぶものの多いものとなりました。偶然にも東京大学病院で同じ病気に発症し入院したので、両国の病院比較とい



う形で書こうと思います。

私が入院した病院は延世大学のセブランス病院という、韓国で最初に創設された近代式病院です。現在では国際化も進み、韓国でもっとも最先端に行く病院として高い評価を受けています。地上 21 階、総面積約 50000 坪の巨大な館内は、非常に清潔で豪華な作りになっており、まるでホテルのようでした。5 階部分の高さまでは吹き抜けになっており、ガラス張りのエレベーターが各階を貫通しています。書画、西洋画、生け花、オブジェ、現代アートのブースなど、芸術作品の展示は非常に多く、院内には植物園がありグランドピアノの演奏などもあります。私が見てきた中では、これほどに芸術的かつ居心地のいい病院は日本にありませんでした。

韓国特有なのが、家族の看病で、文化の差を感じるものでした。韓国では基本的に家族の誰かが病院で毎日一緒に過ごし、寝るときも病床の横で、というのが珍しくありません。ですので、家族用の簡易ベッドもあり、食事補助や排泄の補助なども基本家族が行います。日本ではヘルパーの担う仕事を家族が担っているのだな、と感じました。私の場合は母親が飛行機で飛んできてくれたのですが、到着までの間はなんと隣の患者さんの奥さんが様々手伝ってくれました。聞

くと、家族を中心に考える儒教の影響がこういった文化に根強く残っているそうです。

セブランス病院はプロテスタント系の病院です。そもそも韓国におけるプロテスタントの初期の布教は、教育活動や医療活動を通して行われたのであり、セブランスはその活動の先駆とも言える病院でした。病院内に教会はあるものの普段はあまりその存在を感じないキリスト教でしたが、その影響を非常に強く感じたのが手術室でした。ちょうど手術室に向かう患者から見える位置に「Don't be afraid, for I am with you」とあったのです。これはイザヤ書 41:10 の聖句だそうです。それ以降、手術に至るまでの待合室でも一番患者の目に入る位置に様々な言語でこの聖句がありました。私自身聖書に関する知識も愛着もないのですが、不思議と心が平安になるようでした。誰しも手術前は不安であり、その病気が重ければなおさら、死の恐怖まで感じる場です。そういった場で宗教の果たす役割について、患者の立場で感じさせられました。日本でも東日本大震災を通して宗教と医療の融和が口にされるようになりましたが、再びその可能性を感じる体験となりました。

もちろん、セブランス病院に圧倒的に不足していたと思うものもあります。そ

これは医者と患者のコミュニケーションです。毎朝の回診ではろくに会話もなくただすぎさって行く医師たち。手術に関する説明も5分ほどで終わり、インフォームドコンセントとは名ばかり。患者に理解させようという姿勢はなく、ただ必要書類のサインを求める、といったものでした。二度目の入院では、原因と治療法について不明な部分があったので何度も確認しましたが、誰に聞いても上の方に聞けとの一点張りで、最終的に判明したのは退院当日でした。東大病院に入院した際には担当医師及び看護師の対応が、終始非常に丁寧で安心感のあるものだったので、ここには大きな差を感じました。社会慣習によるのか医療教育によるのかわかりませんが、医療パターナリズムを非常に強く感じました。言い換えると、セブランス病院は箱ものという形では非常に発展しており、入院期間を過ごすのには最高の空間でしたが、患者と医者との信頼関係などの内面の部分では多くの改善点を多く持っているように思えました。

今回の留学は、大学内で学問をする、という面では今ひとつな結果となってしまいましたが、入院経験など、大学の外で実際に日韓の違いを学ぶことはさらに多い期間となりました。特に、韓国の医療は日本の医療に何を学べるか、という

のは韓国の医者の方がよくおっしゃっていましたが、逆に日本の病院が取り入れるべき韓国の良い点も多かったように感じました。将来的にも、その違いを知った上で、特に医療の分野で、両国が交流し発展していけるように貢献していきたいと思います。



ソウル大学内

